

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 ——'96年秋～'97年——

小嶋秀夫

#### [発達・家族・歴史・文化・比較]

1 日本発達心理学会第8回大会でのシンポジウム「比較の論理と方法：何のために？そしてどのように？」を企画し司会役を務めた。比較発達社会史の構築をめざす中内敏夫氏（中京大学）と文化人類学・医療人類学の松岡悦子氏（旭川医科大学）を招いて提言してもらい、それを発達心理学がどう受け止め応答するかを課題としたものである（1997年3月、大阪大学）。

2 ブラジルのサランピ村のリゾートホテルで1993年7月に開催された「発達における決定論と非決定論」のワークショップの成果が1冊の書物として刊行され、私のコメンタリー論文もそれに載っている。Kojima, H. (1997). Looking backwards and forward, and the place for indeterminism. In A. Fogel, M. C. D. P. Lyra, & J. Valsiner (Eds.) *Dynamics and indeterminism in developmental and social processes* (pp. 273-284). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

このワークショップには、11カ国・27名の理論発達心理学の研究者が招かれたが、そのうち東洋人は私一人であった。われわれにとって難しいテーマを扱ったものであったが、私のコメンタリー論文を意味あるものと認めるフィードバックがあったことは幸いであった。欧米の学者の広さ・深さと論議技術にはかなわないと思うのはたびたびであるが、われわれもきちんと考えた結果を工夫してコミュニケーションすれば、それなりに評価されるものである。

なお前年度のこの欄で記した書籍は1996年秋に出ていたが、正式の出版年は1997年であったので訂正する。Tudge, J., Shanahan, M., & Valsiner, J. (Eds.) (1997). *Comparisons in human development: Understanding time and development*. Cambridge University Press. 私の所載論文を、心理学研究者の他に歴史家が評価してくれたのはうれしかった。

3 C. C. Lewis の *Educating hearts and minds*

(1995)を扱ったコメンタリー論文が1年半経ってから現れた。これも単なる紹介ではなく自分の論議を展開させたものである。Kojima, H. (1997). Classroom process brought alive and cultural talks in the mind. *Curriculum Inquiry*, 27(3), 369-377.

4 その他に、かんたんなものであるが、解題というものを初めて書いた：小嶋秀夫（1997）。三島通良『日本健体小児ノ发育論』、武政太郎『日本の子供』解説 上 笙一郎（編）日本＜子どもの歴史＞叢書 第9巻（pp. 1-4）久山社。学校保健の父とも呼ばれる三島の使命感と集中的な努力、それにもかかわらず自分で収集したデータの質の問題を明確に意識していたことは敬意に値する。

この9月から来年6月末まで、私はオランダ人文学・社会科学高等研究所（NIAS）の招聘を受けて、Wassenaarという小さな町に滞在中である。2名の歴史家と4名の発達研究者による共同作業をし自分の仕事も進める他に、40名ほどの多様な領域の研究者と日常的に相互作用できるのは初めての経験である。実に久しぶりのことであるが、じっくりと読んだり思索する時間があることも感謝である。

#### [家族関係、対人関係研究]

1 テキストの改訂版が出た。小嶋秀夫（1996）。親となる過程の理解 武谷雄二・前原澄子（編）母性の心理・社会学〔助産学講座3〕（pp. 87-124）。医学書院。

2 小学生を主対象とした社会的支援体制の研究結果は、とりあえず報告書にまとめた：科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書 幼児・児童の社会的支援体制に関する心理・生態学的研究（1995-1996年度）1997年3月(35+34pp.)。また、日本発達心理学会第8回大会でも発表した。なお共同研究者は宮川充司・佐藤朗子である。

(1997年9月22日)